「ツイシカリ･アイノ（対雁アイヌ）」
―J. M. ディクソン著、1882 年、東京―

翻訳・解題　阪口諒

キーワード：対雁アイヌ、樺太（サハリン）、ディクソン、アイヌ文化、アイヌ民具

はじめに

本稿は、ジェームズ･メイン･ディクソン（James Main Dixon, 1856-1933）による、対雁アイヌの文化を概説した The Tsuishikari Ainos の翻訳である。対雁アイヌは、日本とロシアの間で結ばれた樺太千島交換条約によって樺太（以下、地理名称としてはサハリンとする）から北海道の宗谷に移住することとなり、後には対雁へ強制的に移住させられた樺太アイヌである。その言語に関しては、後述するようにサハリンへの帰還者が残したものが比較的多く残されているが、文化に関する記述、特に対雁に居住していた時のものは非常に少ない。ディクソンによる記録は対雁アイヌの文化を検討するうえで非常に貴重なものであり、註釈を付けて公刊することにした。今回、翻訳するにあたって、ディクソンによる対雁アイヌに関係するもう一つの報告（Dixon 1882b）も合わせて翻訳し、そこに掲載されている図も引用することで、対雁アイヌの文化を視覚的にも理解できるように努めた。

1．「ツイシカリ･アイノ（対雁アイヌ）」について

本稿は The Tsuishikari Ainos（Dixon 1882c. 以下「ツイシカリ･アイノ」）を解題･翻訳したものである。著者はジェームズ･メイン･ディクソン（James Main Dixon, 1856-1933）である。本文は *Transactions of the Asiatic Society of Japan*『日本アジア協会紀要』[1]に掲載されたもので、英語で記述されている。原著は対雁アイヌの文化に関する概説であるが、類書に見られない記述があり、貴重な資料である。ディクソンは 1882 年に対雁を訪れている（Dixon 1882b: 507）が、その時に収集した民具は Dixon（1882b, 1882c）で紹介されている。

著者の J. M. ディクソンは 1856 年にスコットランドで生まれた。エディンバラ大学、セント･アンドルーズ大学で文学と哲学を学び、1879（明治 12）年に工部大学校（東京大学工学部の前身）の英語教師として来日する。1886（明治 19）年には帝国大学の英語学と英文学の教師となり 1892 年まで務めた。1892 年に日本を離れるまでの間、日本人学生向けの英語教材を多数執筆しているが、そのほか日本文化やアイヌ文化に関する研究もいくつか報告している（以上、昭和女子大学近代文学研究室 1972 による）。そのうちアイヌに関わるものとしては、1881 年の①②Traveling in Yesso 1, 2、1882 年

[1] 日本アジア協会とその紀要に関しては秋山（2004）が詳しい。

の③A Visit to Poronai　④Aino Illustrations, Notes to Illustrations、1883 年の⑤⑥The Aino Language Ⅰ, Ⅱがある。④～⑥は対雁に関するものであるが、それらは 1882 年の夏に行った調査に基づいていると思われる。④はアイヌ（1 点を除いてすべて対雁アイヌのもの）の衣服、道具などを図入りで解説したものである。これは前述のように「ツイシカリ･アイノ」と合わせて紹介するのが適切だと判断したため、本稿の第５，６節に翻訳と図版を掲載した。⑤、⑥は樺太アイヌ語の文法である。⑤は、中川（1987: 34）で紹介されているように、プフィッツマイエルのアイヌ語文法（Pfitzmaier 1851）を下敷きにし、バチェラーの語彙を参考にしてはいるが、ディクソン自身が対雁アイヌから聞き取ったものを元に編んだアイヌ語の文法記述である。⑥は⑤の続きだが、例文の多くはドブロトヴォルスキーの『アイヌ語ロシア語辞典』（Добротворский 1875）から転載されたものであり、ディクソン本人が対雁で採録した例文は少ない。なお、本稿で訳出する「ツイシカリ･アイノ」の末尾に、「私のノートにある、語彙とわずかな文法のスケッチについては、再度の訪問による修正で、より信頼のおけるものとなった時に［日本アジア］協会に提出したい」とあるが、Dixon（1883a, b）で文法を記述した以外に記録は公刊されていない。

２．対雁アイヌに関して

1875 年、千島樺太交換条約でサハリンがロシア領になるのに伴い、亜庭湾周辺の樺太アイヌ 841 人が宗谷へ移住することになった。そこから開拓使によって小樽さらに対雁（現江別市）へと強制移住させられる。こうして対雁に居住することとなったアイヌは「対雁アイヌ」と呼ばれている[2]。対雁への移住は、樺太アイヌが強く反対していたにもかかわらず、開拓使は銃を持った巡査を動員し、移住を実行した。対雁では授産施設として製網所が置かれ、また初めての特設アイヌ学校[3]が設置されている。開拓使は対雁で農業に従事させようとしたが、漁撈を生業としてきた樺太アイヌはそれを望んでおらず、石狩川河口の来札や厚田村の漁場で働くようになっていった（以上は樺太アイヌ史研究会[編] 1992 に基づく）。なお、ピウスツキは、サハリンへ帰郷した対雁アイヌから聞き取りを行っているが、サハリンから脱出するまでの混乱期に味わった艱難辛苦や、新環境への移住が、心理的にも大きな影響を与えたとしている。また、日本で精神を病んだ者も少なくないと指摘している。和人との間の諍いは日常茶飯事だったという[4]。

こうした中で、対雁や来札にいた対雁アイヌは、1879 年のコレラ、1886 年から 1887 にかけてのコ

[2] ピウスツキ（2000: 226）、Batchelor（1901: 273）などでは「石狩アイヌ」と呼ばれている。サハリンの一部の人からは「マツマイスキー」とも呼ばれていた（ピウスツキ 2018: 232）。Landor（1893: 178）は、当時、来札にいた対雁アイヌが自らのことを「カラフトゥアイヌ（Karaftu Ainu）」と呼ぶと記している。また Kraftu（時に Krafto と発音）がサハリンを指すアイヌ語の名称だという。千徳（1929: 1）もサハリンのアイヌ語名称を「カラフト」としている。

[3] これに関しては小川（2013）が詳しい。ここで後述の山邊安之助や千徳太郎治が学んでいる。

[4] このことは山邊[著]･金田一[編]（1913: 43-51）にも記述されている。

レラと天然痘の大流行によって 400 人あまりが命を落とした。その前後[5]からサハリンへ帰還をはじめ、日露戦争後にサハリンが日本領となるとともに対雁アイヌのほとんど全員が故郷に帰還した[6]。ロシア領となっていたサハリンでは、日本国民となっていた対雁アイヌは法の埒外に置かれ、外国籍労働者として扱われ、操業の停止が命じられたり、法外な罰金を課されたりしたことが記録されている。こうした状況の中で、ロシア国籍の取得も目指されたが、日本政府の当局者は対雁アイヌの国籍問題への対処を拒否し（ピウスツキ 2002: 226；ピウスツキ 2018: 44-45, 230-237）、日露戦争中でも日本政府は日本国籍を持つ対雁アイヌの帰国を促すことがなかった（田村 2011: 112-113）。なお、ロシア領に居住し続けていた樺太アイヌは 1933 年になって日本の戸籍に編入された。その後、1945 年に日本が戦争に負けたことで、サハリンはソビエト連邦の占領下に入り、1949 年までに樺太アイヌのほぼ全員である約 1200 人が故郷を離れ、北海道以南へ「引揚げ」[7]を行った。

対雁アイヌ自らが対雁、石狩に居住していた時のことを語ったものとしては山邊[著]･金田一[編]（1913）や千徳（1929）がある。そのほか対雁アイヌの言語･文化に関する記録には、Dixon（1883a, b）以外にもいくつか残されている。イギリス人宣教師のデニング（Dening, W）[8]も対雁において樺太アイヌの語彙を 200 語ほど記録している（Dening 1881）。そのほか、イギリス人宣教師のバチェラー（Batchelor, J）もデニングの紹介で対雁アイヌのデンベ（畠山伝兵衛）[9]からアイヌ語を習っている[10]。そのほか、対雁アイヌがサハリンへ帰郷してからのものには、Piłsudski（1912）をはじめとした民話集や、荻原[解説]･丹菊[訳註]（2001）や、前述の山邊[著]･金田一[編]（1913）、千徳（1929）のように、対雁アイヌ自らが残したものがあり、その歴史や言語を考えるうえで貴重な資料となっている。

3. 翻訳に関する注意点

原題は The Tsuishikari Ainos とあり、文字通りには「ツイシカリ･アイノ」である。文中でも Aino となっているが、タイトルを除き、翻訳ではアイノではなくアイヌに統一した。また、地名に関しては当時漢字で書かれていたと思われる地名は漢字に直した。以下の本文の一部にアイヌ語が出てくるが、

---

[5] ピウスツキ（2018: 232）には、対雁アイヌの樺太への最初の帰還は 1887 年で、その後もほぼ毎年のように繰り返されたとある。1904 年当時、帰国者の人数は家族を含めて男 102 名、女は 101 名だったという（ピウスツキ 2018: 232；ピウスツキ 2000: 226）。阿部（1985: 49-50）は、日露戦争以前に 236 人が帰還し、最終的にサハリンへ帰還したのは 366 人だとしている。

[6] サハリンへ帰還した対雁アイヌの中には、ピウスツキの協力者としても著名な人もいる（Piłsudski 1912,1990; Пилсудский 1914, 2002）。後述の山邊安之助や千徳太郎治は後に著作を残している。

[7] これに関しては田村（2008）が詳しい。

[8] デニングに関しては昭和女子大学近代文学研究室（1959）が詳しい。

[9] 後に出てくるチコビル（チコヒロ、知古広、知古広、知古美郎）のおじである。

[10] バチラー[著]･村崎[校訂]（2008: 133-134）や早川（1970: 211-212）参照。Batchelor（1925）には対雁アイヌから聞いたと記載されている物語が 6 篇あるが、アイヌ語テキスト自体は Piłsudski（1912）からの転載であり、バチェラー自身の記録ではない。実際に聞き取っていた可能性はあるが、そのときの記録が残されているかは不明である。

アイヌ語のカタカナ表記はディクソンによるローマ字表記から推定される形である（日本語 (と思われる) 語彙の場合はこの限りではない。例: *torii*→鳥居、*sake*→酒）。アイヌ語には濁音と清音の区別がないが、カタカナ表記では原文の表記に従い濁音も表記した（*sindoko*→シンドコ「行器」）。b, g, d, j はそれぞれ、p, k, t, ch（近年広く用いられる方式では c）に置き換えても問題はない。註においては、引用以外のアイヌ語表記は服部[編]（1960）の表記方式に従って記述した（ただし、声門閉鎖音は省略した）。そのため、本文と註、引用箇所で表記法が一致していない。翻訳中に見られる［　］で囲った部分は、原文になく、訳註者が挿入したものである。／を引いてあるものは、英語からではどちらの訳語か判断できなかったものである。

訳註で一部の文献は略称で表示した。略称を使用した文献は以下のとおりである。

【ド辞典】: Добротворский, М. М. (1875) *Аинско-Русский Словарь*. Казань.（アイヌ語部分は原文の表記と、筆者の表記を並べて記載した。そのため寺田[訳]、寺田･安田[訳]、井上[訳]とは異なる箇所がある。引用は訳者の名前で表示した）

【物語】: 山邊安之助[著]･金田一京助[編]（1913）『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』博文館.

【植物編】: 知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典 植物編』日本常民文化研究所.

【人間編】: 知里真志保（1954）『分類アイヌ語辞典 人間編』日本常民文化研究所.

【動物編】: 知里真志保（1962）『分類アイヌ語辞典 動物編』日本常民文化研究所.

【方言辞典】: 服部四郎[編]（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店.

【住居民具】: 山本祐弘[著]･知里真志保[協力]（1970）『樺太アイヌ･住居と民具』相模書房.

【萱野辞典】: 萱野茂（2002）『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』三省堂

4．「ツイシカリ･アイノ（対雁アイヌ）」翻訳

ツイシカリ･アイノ

J. M. ディクソン（MA[11]）

［*Read Nov. 8th, 1882*］

対雁は、札幌平野に位置し、札幌からおよそ 12 マイル東にある小村である。そこに住み着いたアイヌはサハリン、つまり、一般に樺太と呼ばれるところからの移民である。日本政府の誘いにより故郷を離れていまや 8 年ほどになろうとしている。年寄りたちは後悔の念とともに 1875 年より前の時代のことについて語る。年寄りたちによれば、樺太の川や海岸は、石狩の川や湾で見られるものよりも大きくて立派な魚で溢れているという。1863 年から 1875 年にかけて、日本はサハリンにおける国境問題をロシアと解決しようとしていたが、その結果としてサハリンの一部を北千島と交換することになった。1875 年、日本は石狩の川岸の土地を、そこに居住することを望んでいた[12]数多くの日本の臣民となった樺太アイヌに与えた。700 か 800 人のアイヌ[13]がやってきて、石狩川の河口から 12 マイルほど離れた、豊平［川］と石狩［川］の合流点に藁ぶきの家を建てた。アイヌのリーダー（オテナ *oténa*[14]）の名前はチコビル Chikobiru[15]で、今は老人であるが、昔日に対する後悔にあふれている。チコビルの家は他の家に比べて少しも豪華ではない。［他の住民と同じように］簡素であり原始的で、ほんの少し大きいにすぎない。鳥居 *torii*、つまり門構えのようなものが他とを区別する唯一のものだった。

生活様式

対雁アイヌは本質的に漁師であり、食糧のほとんどは魚、米、ユリ（キウ *kiu*[16]）のすりつぶした根

---

[11] Master of Arts 文学修士のこと。1879 年にセント･アンドルーズ大学（University of St Andrews）から MA（文学修士）を取得している。

[12] 樺太アイヌは本来、北海道へ移住するにしても宗谷に居住することを希望していたのであり、対雁への移住は望んでいない。反対の意志が表明されたものの、開拓使によって強制的に対雁へ移住させられている（第 2 節参照）。

[13] 対雁へ移住した時点の人口は 854 人である（樺太アイヌ史研究会[編] 1992: 117）。

[14] 日本語の役職名「乙名」がアイヌ語化したもの。

[15] チコヒロ（日本名は木下知児廣 (千徳 1929: 37 など)、知古美郎 (山邊[著]･金田一[編]1913)）のこと。父親で、楠渓（トマリオンナイ）の乙名であった木下（畠山）此兵衛（小樽への強制移住時に吐血し亡くなる）の跡を継いでいる。樺太からの移住時には総頭領となっている、北海道ウタリ協会アイヌ語勉強会[訳]（1989: 122）によるとチコヒロの母は木下フエマハで、父はアツヤエターク（此兵衛）、伯父はクシュンコタンの総乙名で、対雁移住後は移民伍長や対雁学校取締などを務めた畠山伝兵衛である。なお、伝兵衛（デンベ）はバチェラーに最初にアイヌ語を教えた人物でもある（バチラー[著]･村崎[校訂]（2008）133-134 頁、早川（1970: 211-212）参照）。

[16] キウ kiw はオオウバユリ･エゾウバユリの鱗茎を指す《真岡》（【植物編】197）。

からなっている。シカ[17]は彼らのすぐ近くには見られないので、必然的に、沙流アイヌのように、彼らはそれを狩るのに時間を費やすことはない。しかし、クマは隣接する丘にたくさん生息しており、それを狩ることは、彼らの栄光である。札幌の博物館には、ほとんど牛の大きさに達するといってよいクマが保存されている[18]。それは2、3年前に数人を虐殺した後、最後の犠牲者である幼児を消化しきる前に仕留められた[19]。私が意見を求めたアイヌたちは、臆病者に対応するネイティヴの（アイヌ語の）表現を教えることができなかったか、もしくは教えようとはしなかった。そして、そうした言葉は存在しないと言った。そのようなことが事実であろうとなかろうと（沙流方言にはその単語が確かに存在する）、アイヌは間違いなく恐れを知らない人種である。アイヌはあまり強力ではない弓を携えて狩りに出かけ、クマに矢を放つと、クマと取っ組み合いをし、粗末なナイフを用いてとどめを刺す。

アイヌのうちのあるものは、ポロナイ（幌内）への新しい鉄道[20]の日雇い人夫として雇われている。他の2、3名は馬子として、札幌とその近郊で雑用をするために雇われている。しかし、アイヌの大部分は生活のために漁撈に依存している。

容貌、衣服など

私がこれまで目にした最も晴れやかで陽気な男は、私が初めて対雁を訪れた時に案内人を務めてくれたアイヌだった。男性の多くは広くて形のよい額とむき出しの顔[21]で非常にハンサムである。男性は額を剃り、背中側の首筋で髪を刈り上げる。そのため頭をのけぞらせているように見える。彼らは純粋な人種の誇りある自由な歩みをしている[22]。長い顎髭を蓄えることは、特に年寄りたちの間では慣習的なことであるが、この人種は野外生活に慣れ親しんでいる土着の男性よりも、平均的に毛深くはない。

---

17 シカは樺太には見られない。樺太の物語で yuh（北海道の yuk「シカ」に対応する）はヒグマを指す（Piłsudski 1912: 212）。Dixon（1883a :70）のアイヌ語例文ではシカは shika というように日本語が用いられている。

18 このヒグマは札幌農学校（現北海道大学）で解剖の後、剥製にされ、現在も北海道大学付属植物園に保存されている。以下の註19参照。

19 1878年（明治11年）12月5日、石狩国札幌郡丘珠村（現在の札幌市東区丘珠町）などで開拓民の夫婦らを襲い、死者3人、重傷者1人を出した札幌丘珠事件のこと（本間 1981）。

20 官営幌内鉄道のこと。Dixon (1882a) にはディクソンが幌内を訪れたときのことが記述されている。江別（Ebets）でアイヌと和人が半々の群衆に遭遇しているが、前者はそこから２マイル離れた対雁に住んでいるとある。

21 原文は open faces。容貌を述べている箇所なので、「むき出しの」とした。ディクソンが訪問した時には髭を剃っていた可能性がある。実際、対雁アイヌが役人の上野正と一緒に写っている写真では、髭を生やした者は確認できない（樺太アイヌ史研究会[編]: 170）。それに対して、対雁への移住時の写真（同書: 160）で男性は髭を生やしている。

22 抑圧された環境に置かれているにもかかわらず、依然として堂々とした歩き方をしているということかと思われる（平石氏私信）。

女性は魅力的ではないことは決してない。女性は態度が内気で控えめで、非常に甘く悲しげな声を出し、表情豊かな黒い目をしている。子供たち、特に女の子の中には、とても明るく輝き、光を放つようにさえ見える目をしたものもいる。口に入れ墨をするプロセスは、まだ少女と成人女性が実践している習慣であるが、6〜7 歳で始められ、最初は唇の上に少しの点をつけ、その後に青い模様が両方の耳にしっかり届くまで（耳にまで達するほど）徐々に拡げられる。染料にはハバ *haba*[23]の樹皮―すなわち、カバノキの仲間か桜の仲間が用いられる。

アイヌの着物（アルルシ*artrus*[24]）は、日本の着物 *kimono* に似ているが、ずっと短く、袖が手首に向かって細くなっている点が異なっている。オヒオ *ohio*[25]と呼ばれるニレの一種の樹皮で作られた［アイヌ］本来の布は、非常に強く耐久性がある。色は淡色から赤みを帯びた茶色まで様々である。しかしアイヌは外国布の端切れから豪華な衣服を喜んで作ることが常である。この種類の衣服はチキリビ *tskiribi*[26]と呼ばれる。男性の帯（クッ *kut*）はかなりの長さであることが多く、幅は約 2, 3 インチで、しばしばその端はガラス玉で飾られている。このガラス玉には価値がないが、かなり珍重されるようである。前掛け（マイタレ *maitare*）はアルルシ*artrus* の下に身に着け、脚絆（ホシ*hos*）でふくらはぎを覆う。鮭皮で作られた靴と、鮭皮と毛皮とを組み合わせて作られた手袋を冬に着用する。

女性の服装は、男性と本質的に異なる点はない。しかし、女性たちの革製の腰帯からは、金属のリングとコインがたくさん下げられ、装いの中で目立っている。それは一種の財布としても役立つ。医者が請求書を持ってくると、支払いはそこから行われる。頭飾り（ヘトノイェ *hetonoye*[27]）というものもあるが、これは男が着ける頭飾り（センカキ *senkaki*）とは若干異なっている。耳覆い付きの冬用の帽子は、男女とも着用するが、ハハカ *haghka* と呼ばれている。

アイヌが使用する武器の中には、コンケニ *konkeni*[28]つまりイロマキ *iromaki*[29]で作られた弓（ク *ku*）がある。私が持っている標本は長さが約 6 フィートで、沙流アイヌのものよりも強力な武器である。矢は約 2.5 フィートの長さで、非常に軽く矢羽が付けられていて、平たくされた山丹の金属くぎが付

---

23 これは日本語の樺（かば）のことかと思われる。

24 一般にアハルシahrus として知られているもの（【住居民具】211 など）。*artrus* の *ar* はアーを意図したものかもしれないが、【ド辞典】にも artus, артусь の記載があるので、アルルシとした。*tr* は現在、r で表記される音である。The Tsuishikari Ainos の末尾「対雁アイヌの言語」にもアイヌは *dr*（アイヌ語に清濁の区別はない）という音を出すように *r* を発音する、とある。

25 オヒオ *ohio* は、日本語の発音であるオヒョウを記録したものか、アイヌ語の発音を記録したものかは不明である。【植物編】165 頁によれば、オヒョウの樹皮は opiw《白浦》である。

26【住居民具】212 頁に交易で入手した内地製の布で作る衣服がチキリペとある。

27 第 4 節「図版への註釈」ではヘトモイェ *hetomoye* とある。【住居民具】229 頁には男女ともに用いるとある。

28 【植物編】96 頁によれば konkeni はヒロハノツリバナの茎（白浦）だという。【ド辞典】45 頁によれば、頭痛の際には konkeni の靭皮（原文では kónkeni, кóнкени＝靭皮となっている）を頭に巻き付けるか、súruku, сю́рку「トリカブト」の根で体をこするという（寺田[訳] 1996: 90 ; 井上[訳] 2018: 669）。

29 イロマキは日本語名。「konkeni ah ッテ イウ モノ イロマキ ダ」（村崎[編訳] 2001: 312）とあるように、konkeni は日本語でイロマキと言われるようである。

けられている。観察した限り、また知る限りにおいても、毒は使用されていない。他の武器には刀のエムシ*emus*、小刀のマキリ *makiri* がある。アザラシ狩りには、銛（キテ *kité*）が用いられる[30]。

男女ともに喫煙するが、女性は常に喫煙する。自家製のパイプ（キシェリ *kisheri*）は、一片の白い木材から切り取られ、火皿は柔らかい金属で裏打ちされている。

楽器に関しては、女性だけが親しむようである。アイヌが演奏する口琴（モークニ *mōkuni*[31]）には木製のものと、私たちが故郷で見慣れているものと同じである山丹（サンタン）の金属のものの 2 種類ある。限られた音域から、アイヌは非常に甘い音を奏でる。そして、トンカレ *tonkare*[32]、つまり舟のような形をしたハープがあるが、これには 5 本の弦と 2 本の駒がある。アイヌはこれを使って精巧な音楽を試みるのではなく、ヨーロッパ音階のいくつかの音を静かに弾くだけである。あるアイヌは私に、アイヌたちはロシアの歌を唄うことに慣れていると言ったが、もしそうなら、アイヌの音階は私たちのものと間違いなく同じものとなるはずである。

住居、手工芸品など

アイヌの小屋は丸太の粗末な木造建築を覆う茣蓙からなっている。彼らの家は一般的に玄関[33]または入り口[34]を備えており、水桶および他の家庭用品を収容するのに十分な大きさであることもしばしばである。その内部は、窓（プヤラ *puyara*）から差し込む光にあちこちが照らされているが、板張りの床で、煙の強いにおいがする。中央には炉があり、そこでは薪が燃やされるのだろうが、その煙は屋根の穴（プヤラ *puyara*）[35]から出ていく。煤だらけの老女は、炉の側でキシェリ *kisheri* を吸い、すべての出来事に目を光らせているように見える。奥の方の左手の隅には、家の宝物―漆塗りの箱（シンドコ *shindoko*）と他にその家族が持つ先祖伝来の家財―が置かれている。これら［の宝壇］の前は、客人のための名誉の場所となっている。おそらく炉の周りに 2、3 本のイナヲ *inawo*[36]、つまり木製の彫像が立てられるのだろう。

ずいぶん昔のサハリンでは、ある老人が私に語ったように、アイヌはトイチセイ *toichisei*[37]と呼ば

---

30 ピウスツキ（2018: 231）によれば、北海道では獣脂となるアザラシもトドも獲れなかったという。
31 ピウスツキの採集資料では竹の口琴がモ(一)クニ мокуні, mokuni と記録されている（中川 1998: 76）。
32 一般にトンコリ tonkori という名前で知られているものである。ピウスツキの記録には五弦琴 тонкарі, tonkari とある（中川 1998: 75）。
33 母屋に付属する前小屋のことかと思われる。
34 モセムmosem, ウサント usanto（前小屋）と呼ばれるものだと思われる（【住居民具】96）。
35 屋根の穴もプヤラ puyara というのかは不明である。【住居民具】89 頁によれば、リクンプイ rikupsuy である。
36 これは一般にイナウ inaw と呼ばれるもの。アイヌ語の u は日本語のウに比べて円唇性が強くオに近く聞こえる。そのため、ディクソンはアイヌをアイノ Aino、イナウをイナヲ *inawo* と書いているのだと思われる。
37 チセイと聞こえたというよりは、それ以前のバチェラーのアイヌ語記録を参考にしていることによるかもしれない。

れる地下の家に住んでいたものだった。春になると、地下の家から去って地上での暮らしをするが、それも霜と雪を避けて再び地下の家、これは洞窟ではなく屋根を張った穴なのだが、そこに避難するまでの間だけである。札幌の新しい博物館[38]の近くには、それと似たような窪みの跡がいまだに見られるが、それはアイヌが掘ったものか、アイヌより前にいた人種が掘ったものかは確かではない。

アイヌは陶器をほとんど使用しない。少ないながらも持っているものは、日本人から手に入れたものである。彼らの手作りの道具は木製で、粗末な外観をしている。さじ、ひしゃく、魚とご飯の椀、盆、ユリの根をすりつぶすための大きな杵と臼―が、アイヌの所有物のほぼ全てである。

アイヌの食糧庫（プ *pu*）[39]は高床式の小屋で、地面から数フィート上にある。プ *pu* の下には、冬期の使用に備えて犬ぞり（シケニ *shikeni*）が（1 つ）置かれている[40]。それは非常に窮屈なもので、その構造は華奢である。滑り木には骨が取り付けられている[41]。

クマ檻（イソチセイ *isochisei*[42]）は、食糧庫（プ *pu*）と同じように地面から数フィートほど高く作られ、子グマを育てるために建てられている。子クマがとても幼い時には飼い主の女性が乳をのませる。これらの、家で養われたクマは、9 月の熊送りで厳かに殺される[43]。

家庭関係など

家族の頭はアチャ *acha*[44]、つまり祖父である。その息子はアチャボ *achabo*「老人の子供」で、その孫はボ *bo*、つまり子供である。アチャボ *achabo*[45]はオンナ *onna*[46]、つまり父親とも呼ばれる。祖母は

---

38 1877（明治 10）年に設置された開拓使札幌仮博物場は、1882 年に現在の北海道大学植物園の敷地内に、新しく建設されているので、この新しい博物館のことを指していると思われる。これが現在の博物館本館にあたる（以上、北海道大学植物園ホームページより）。

39 もともとサハチセ sahcise「夏の家」に付属するもの。プ pu には冬に備えて、夏季に得たサケ･マスを焼干魚として貯蔵する（【住居民具】1970: 114-119）。

40 シケニ sikeni は夏季は使用しないので、食糧庫 pu の下の脚柱の間に縄で縛って吊るしておく（【住居民具】 123）。

41 ソリの滑走をよくするため、滑り木（ランナー）下部の前半分ほどに、角材状にしたクジラの肋骨を張る（【住居民具】237；荻原･古原 2012: 93-94）。貼り付ける骨はアイヌ語でイフラシ（和田 1965: 65）やモホラシ moxráši（【住居民具】237）という。

42 イソチセ iso-cise「クマの･家」では当歳の子グマを 1, 2 年飼育してから、熊送りを行う（【住居民具】162-164）。

43 樺太アイヌのクマ送りに関してはピウスツキ（2018: 483-646）が最も詳しい。【辞典】の付録 60-62 頁にもクマ送りに関する記録がある（寺田･安田[訳] 2018: 82-84）。クマ送りの背景に関しては知里･山本（1973: 198）を参照。

44 アチャ aca が祖父の意味を表すことは他の記録で確認できていない。

45 西海岸南部の多蘭泊では、acapo は「妻から夫の父を、また夫から妻の父をさす；義父」という（【人間編】492）。服部･知里（1960）において、aca に類似した語彙が「父親」として出現するのは西海岸北部のライチシカ（aaca）だけである（それ以外の地点では aapa, apaa）。ただし、ライチシカで acapo(ho) は「おじ」である（【方言辞典】43）。

46 対雁で生まれ、後に落帆で暮らしていた話者は父親を ona、母親を unu としている（ただし、どちらにも？が付く）（服部･知里 1960）。山邊安之助（第 2 節参照）は（知古美郎の）母を「ウヌヌへ(ママ)」、父を「オナハ」と表現している（【物語】3）。

スフチ *sfuchi*、母親はウヌ *unu* と呼ばれている。曾祖父、またはより遠い祖先はエカシ*ekás* という名前で知られている。スフチ *sfuchi*[47]は女性の祖先を指す一般的な言葉である。ボ *bo* の母方の祖父と祖母は、息子とその父の両方からそれぞれヘンキ *henki* とウナラベ *unarabe*[48]と呼ばれる。日本と同じように、兄･姉と、弟･妹を呼ぶ際に区別がなされる。兄はユボ *yubó* だが、弟や妹はアキ *akhi* である[49]。妹のうちのもっとも年が上の者はトゥレシ*turesh* である[50]。日本人と交わる以前は、息子が祖父の名前を取るのが慣例だったが[51]、今では父親の名前の音節の 1 つを含む名前をつけるという名づけ方をとっている。例えばヤイチ、ヤノスケ[52]、ヤタロ（ウ）という具合である。この例では、ヤイチはアイヌの女性を妻とした日本人であり、息子のヤノスケもアイヌと結婚しており、子供のヤタロ（ウ）は純粋なアイヌとして育てられるだろう。幼児が生まれてから一年を［無事に］過ごしたときに名前が付けられる。

男性は 20 歳になると結婚することになっており、女性は通常 18 歳で妻になる[53]。どちらの側からもお金のやり取りはない。しかし、妻は、衣服や装飾品、そしてチェベチョイェネ *chebechoyene*[54]（魚の椀）やシカリンバチョイェネ *shikarinbachoyene*（茶碗）のような小さな家庭用品を持ってくることが期待される。女性はまた、茣蓙を数枚持っていく。クッ *kut*、つまり金属製の輪とコインが下がった皮製の帯は、一般に母親から継承する。そうでない場合、新しいものを作ってもらう。

---

[47] *sfuchi* とあるが、スフチ suhci かと思われる。参考: suxchi《ニイトイ，オチホ》【雅】祖母（【人間編】488）。

[48] ウナラペ unarape を祖母の意味で使うという報告は確認できていない。東海岸北部の多来加では unahpe が「義母（夫の母）」を表す（【人間編】509）というもの以外確認できない。【物語】付録の語彙集にも unarape「伯叔母」とある（この語彙は【物語】本文に出現しない）。

[49] 【人間編】507 頁では、千島アイヌの間では兄･姉を Habo、弟･妹を Akibo（元のデータでは妹は Ake'bo）と言い、兄･姉、妹･弟が対象関係にあることが指摘されている（データの出典は鳥居 1903: 135-136）。しかし樺太でこのような事例があるかは確認できていない。

[50] トゥレシtures は北海道･樺太に共通して「兄から妹を云う時にのみ用いる」（【人間編】506）。西海岸北部のライチシカでは妹を heekopo(ho)という（【方言辞典】43）。

[51] 【ド辞典】にもこれと重なる記述がみられる。子供は歩けるようになって初めて名前をもらうが、これも本当の名前ではなく、10 歳になって初めて本当の名前をもらう。この名前は、亡くなってから間もない祖父（あるいは祖母）にあやかってつける（この風習はアイヌ語で ure(y)keskoro, ypéй-кеськоро と呼ばれる）機会がなければ、ずっと持つ名前であるという（【ド辞典】第 2 章 39 頁（日本語訳は寺田[訳] 1996: 86；井上[訳] 2018: 661）

[52] 1875 年（明治 8 年）9 月、樺太から宗谷への移住時に作成された人別帳によれば 17 歳の「ヤノシケ」がいるという。1886 年（明治 19 年）「対雁村絵図」には「石山弥之助」という家がある。1895 年（明治 28 年）、約 70 名の対雁アイヌが墓参の名目で樺太に渡航するが、当時の旅券記録に「石山弥太郎」15 歳という少年がいるので、これがヤノシケ（弥之助）の息子のヤタロ（ウ）だと推測される（石村氏私信）。

[53] 千徳（1929: 27）にも同様の記述がある。

[54] coyene(h)は ci-「人が」oine(<oipe)「（場所）で食べる」-p「もの」と思われる。sikarinba coyene, cebecoyene という言葉を他の資料で確認できていないが、ディクソンの図（第 5 節「図版への註釈」参照）からもそれぞれ、sikarinpa-h(~p)「丸い･もの」, cep-e-nipapo「魚･を食べる･椀」と同じものを指していると考えられる。

アイヌの家族は、通常、4 人または 5 人である。母親は座産で分娩を行うが、これは日本にも同じ習慣がある。子供は 4 歳か 5 歳になるまで、母親の胸（乳を吸うこと）を許されているが、すぐに老いてやつれるため、母親にとってはあまり良いことではない。アイヌの母親は子供たちにキスをする（チョチョセ *chochose*[55]）。

夫が死ぬと、未亡人は一般的に夫の兄弟の妻になる。もしくは、兄弟がいない場合、最も近い親族と結婚する[56]。この習俗は、［新約］聖書の「マルコによる福音書」第 XII 章の第 18 節にあるように私たちにもなじみがあるものである。一夫多妻制は存在しないが、内妻（ポンマチ *ponmachi*「小さい、または二番目の妻」）を持つことは珍しいことではない。対雁にはそのような［ポンマチを持った］ものが 14 人か 15 人いる。ポロマチ *poromachi* とポンマチ *ponmachi* の間には、ほとんど何も区別がなされていない[57]。そして、その子供たちも異なる扱いを受けているように見えない。養子は、日本人の間でよくみられるが、かつてはアイヌの中ではほとんど知られていなかった。しかし、ロシアの攻撃的なたくらみに対する防波堤とするために、北方の島の人口増加を望む政府が進めたこともあって、今は前より普通になっている。

病気、薬など

アイヌは非常に健康的な人々であり、ほとんど病気に苦しんでいないようである。しかし、習慣が清潔ではないので、大勢の人が頭部の脱毛を引き起こす疥癬の一種で苦しんでいる。厚い胸をした人種で、肺病／結核（comsumption）にはかかりにくいが、重度の気管支炎（タン *tan*[58]）に苦しんでいて、これはしばしば命取りになる。水腫／浮腫（Dropsy）（ニトバキ･フプ *nitobaki fup*）は、習慣的な大酒飲みが苦しむもので、タン *tan*［気管支炎］は、アイヌたちがかかる病の中で最も深刻なものとみなされている。オンキカラ *onkikara*（風邪）とニトバカラカ *nitobakaraka*[59]（熱）はそれよりは危険ではない。一部のアイヌは腫物（フッペ *fuppe*[60]）に苦しんでいる。そして性病が日本人によって持ち込まれた。

治療には主として薬草が用いられる。内服用の煎じ汁は、野草のフシキナ *fushkina*[61]とカムイキナ

---

55 北海道での cokcokse「キスする」（【萱野辞典】317 など）に対応する語形。

56 大貫（1979: 102）には「夫婦のいずれかが死亡の場合、夫の死亡の場合は、亡夫の兄弟が未亡人を第一夫(ママ)か第二夫(ママ)にすることが好まれる。これは父系を辿る親族組織の表現の一つで、未亡人を亡夫の父系から離さないようにするわけである。妻の死亡の場合には一定のパタンはない」とある。

57 大貫（1979: 102）によれば「第二の妻はメカケでないことである。第一の妻との結婚よりも簡単な儀式であるが、正式にその女を妻（pon mah すなわち「小さな女」と呼ばれる）とするのであって、情事とははっきり区別されている」という。

58 他の資料で確認できていない。

59 ni(~e)topak(i) araka「身体･痛み」だと思われる。-araka 型の病名に関しては和田（1964: 102-103）に詳しい。

60 腫物に関しては和田[編]（1964: 107-108）参照。

61 【植物編】によると、フシキナ huskina はクルマバソウ《真岡》（白浦では yuskina）のことであり、

kamuikina[62]から作られる。乾燥した貝／甲殻類（shell-fish）の一種をぬるま湯に入れ、それを漉して飲用する。貝／甲殻類（shell-fish）のワカ *wâka*[63]とアシケタ *ashketa*[64]がこのように用いられる。水腫(症)／浮腫(症)の場合には、液体の半分のみを服用し、残りの半分は温湿布として使用される。またイキサッチェッポ *ikisatcheppo*[65]という小さな魚もあり、この標本を私は持っているが、これはアイヌが脇腹の痛みの治療薬として大いに珍重している。これは焼いて灰にし、そしてペーストにして塗り薬にする。カタツムリ／巻貝のペーストは、性病に用いられる[66]。

トゥスグル *tusuguru*、つまり医師は医学医師というよりも呪術医であり、患者の治療法については宗教の項目で後述する。

埋葬の儀礼

アイヌが亡くなると、トゥスグル *tusuguru* が立ち会い、亡くなってから埋葬までの間―冬の場合 3 日間、夏の場合は 2 日間―遺体を見守る。遺体の側には、親戚が水と米の椀を置き、通夜が終われば、長い木箱、つまり棺に安置する。棺の中は空ではなく、亡くなった人には鍋（シュ *shu*）、木製の椀（イダンキ *idanki*）、刀であるエムシ*emús*、そしてイコロ *ikoro*、つまり金めっきした棒[67]が副葬される。アイヌは一般に［1 人につき］2 つのイコロを持っている。1 つは子供たちに伝えるもので、もう 1 つは、すでに見たように、遺体とともに墓に納められる。

親戚は川岸近くの森や背の高い草の中といった人目のつかない場所に墓を掘る。対雁で墓地を見つけるのは非常に難しかった。案内人と一緒でも、豊平［川］の南岸にある森の中に見つけることはできかった。一方、おそらく孫である何人かの娘によって、ある家から別の家に移されるのを私が見た非常に年老いたアイヌは、亡くなって、［私が墓地を探した］その前の夜に、川の近くの北側［の土地］に埋葬されていた。新しい足跡をたどってその老人の墓を非常にたやすく発見することができたが、案内役の混血のヤノスケは、私がどこに行ったのかを村にいる他の誰にも言わないように頼んで

「この植物わ、特有の臭気をもち、それが病魔を近ずけぬと信じて、流行病のある際その莖葉の「うセイ」usey（煎汁）を盛んに飲用し、粥の中にも少量炊き込んで食ったりした。ふだんから乾し貯えておいた」（【植物編】31）という。

62 どの植物のことを指しているのか不明。

63 どういうものなのか不明。

64 asketeh「ホタテ貝」《多蘭泊；富内》（【動物編】120）のことだろうか。

65 【動物編】68 頁に ikisaxchexpo サブロオ（クマガイウオ）とある。【ド辞典】には「イキサハチェフ゛ ikisahcèb（Икисахчѐбъ）は、下顎の長い、浸透性のある、円錐状の魚である。スープにして、刺すような胸の痛み用の薬にする」（【ド辞典】付録 71; 寺田･安田[訳] 2019: 126）。

66 Ohnuki-Tierney（1981: 188）にある、*ekaytama čaru araka*（カタツムリの口の疾病）のことだろうか。硬口蓋と軟口蓋がカタツムリのように腫れ上がり、多くの唾液が分泌されるものだという。カタツムリから作ったスライムを患部に塗布することで治療するという。

67 イコロ *ikoro* は飾り太刀のことかと思われる。刀身が無いことが多いので、刀とはみなさなかったと思われる（中川先生私信）。

きた。さもないと［＝墓地に行ったことを言ってしまえば］村人が自分を刺す（チウ *chiu*）のだと言った。以前に墓を見たことのある外国人は誰もいないと案内人は語ったが、確かに私は［対雁アイヌとは］異なるエゾ･アイヌの墓（Scheube[68], Siebold[69], Miss Bird[70]参照）以外に、墓のスケッチや記述に出会ったことはなかった。死者は埋葬され、シーボルト（Siebold）がエゾ･アイヌでは家を燃やすことがよく見られると指摘しているが、そのように親戚が家を燃やすことはない。それどころか対雁アイヌの小屋は世代を超えた住居として可能な限り長く後に残すことが許されている。

宗教、迷信など

アイヌは神々を無数に崇拝し、ほとんどすべての自然物は神となりうるようである。太陽の神と月の女神、クマ神とアザラシ神、川の神と山の神がいる。神と女神の区別は、イナヲ *inawo* の様式でなされ、女神の（に捧げられる）イナヲ *inawo* の軸は飾り付けられている[71]。以下は特に好まれている神である：

チュプ･カムイ Chup-kamui[72]..... 太陽の神
トンベ･カムイ Tombe-kamui ..... 月の女神
イショ･カムイ Ishó-kamui ..... クマの神
アトゥイ･カムイ Atui-kamui[73]..... 海の神
ウンジ･カムイ Unji-kamui..... 火の神
オピッタ･カムイ Opitta-kamui ..... 世界神[74]

アイヌは非常に迷信深い人々のように見える。超自然的存在を強く意識し、恐れているようで、その存在の活動と影響から世界の現象が説明される。アイヌが天国（イリウェシ*iriwêsh*[75]）や地獄（シ

[68] Scheube（1881）のこと。
[69] Siebold（1881）のこと。
[70] Bird（1880）のこと。
[71] 東海岸小田寒で暮らしていた T･H 翁によるイナウに関しては北海道開拓記念館[編]（1973: 20-35）に詳しい。
[72] 【ド辞典】付録 64 頁には「チュフ･カムイ（Cuh-kamùy, Чуфъ-камӳй）「すべての天体の神」；月に住む。新月ごとに彼は生まれ、成長して少年になり、大人の男になる。そして、月が欠けるときは、老人となって死んでいく。すべての神々の中で、チュフ･カムイだけが女性と犬を持つ。月へ去るときに、女性と犬を奪ったのである」（寺田･安田[訳] 2018: 87）とある。
[73] 【ド辞典】付録 64 には「アトゥイ･カムイ（atùy-kamùy, атӳй-камӳй）「海の神、海の動物」という言葉は、アイヌによって、すべての大きな海の動物（とくに、トド、ワモンアザラシ、鯨、イルカ）に添えられて用いられる。海の神々の中に、海での漁の管理をつかさどる神が一人いる。そして、漁の成功はその神一人に懸かっている。その神には供物としてイトウの下顎が捧げられる」（寺田･安田[訳] 2018: 86）とある。
[74] 原文は the universal god で単数であるため、「世界神」とするのが良いと思われる（中川先生私信）。
[75] 管見の限り、ほかに記録がない。樺太アイヌの間で死後の世界はポホナコタン pohna kotan と呼ば

リウェシ*siriwêsh*[76])、さらに死んだ親戚の話をすることはまずない。死んだ親戚のことを話題にすることはアイヌにとって不愉快なことである[77]。ある晩、トゥスグル *tusuguru* に、父親と祖父も同じような職業に従事していたのか、たまたま聞いたのだが、トゥスグルの顔が曇り不機嫌になったことに気付いた。トゥスグルの友人は、そのような死者のことを話題にするのは総じて歓迎されないのだと助言してくれた。

飲酒の前に、イコニッ *ikonit*[78]、つまり髭べら[79]を酒杯に軽く浸し、特別な結び付きのある神々への捧げ物として周りに少量の酒 *sake* を振りかけることが習慣になっている。彼らのイナヲ *inawo*、つまり木製の偶像は、特別に敬われ崇拝されているのでは決してなく、彼らが崇拝する神々を単に思い出させるものであるようである。私は川岸やその他の場所で数本のイナヲを見てきた。そこにイナヲが存在することで、自分たちの存在を思い出してもらえた神々が喜んでいるのかもしれない。

トゥスグル *tusuguru*、つまり呪術医は中年の男性で、その周りには薄気味悪く神秘的な気配が漂っている。狭い額には、ふさふさのつながった眉毛があり、その下には人目を盗むような目が隠れている。そして力強い身体には長い腕が備わっている―これは彼の最も人目を引く特徴である。このトゥスグルより父親が有名で、かつてとても重んじられた巫術の儀式を演じていたものである。ある人が説明してくれた。そのアイヌの男は、ある種の事柄について神の意志を知りたいと望んでおり、トゥスグル *tusuguru* の助けを求めた。トゥスグルは夜に、2 つの新しい柳（スス *susu*）の枝を持って来て、樹皮を剥いで、それを炉の側の茣蓙の上に置いた。それから、トゥスグルは、自らの意志を表明するためにウンジ・カムイ *unji-kamui*[80]を呼んだ。まもなく神の足音が聞こえ、その音はトゥスグル *tusuguru* のすぐ側にやってきて、［柳の］枝はそわそわと落ち着きのない様子を示し、下に敷かれた茣蓙を叩いた。コツコツという音が二回して、同意することが示された。ひっかく音や擦れる音は好ましくない前兆だった。神がその家を訪れたという確証として神の足跡があるが、それらは家の周りに見られ、ちょうどノミで掘り抜かれたかのようにはっきりと示されていた。

れるが（【ド辞典】など）、ここに出てくるように天国と地獄を表現し分けた例は、確認できていない。【ド辞典】によれば、魂は肉体とともに墓には行かないで、イワスイ（Iwásuy, Ива́суй）と呼ばれる森の中の穴を通ってポホナ・シリ（Pohna-Siri, Похна-Сири）あるいはポホナ・コタン（Pohna-kotan, Похна-котанъ）へ行く。こちらが冬のときは、ポホナ・シリでは真逆の夏である。ポホナ・シリにはコタン・カラペ（Kotan-karapè, Котанъ-карапѐ）と呼ばれる創造神だけが住んでいる」とある（付録 59、寺田・安田[訳] 2018: 51）。

76 註 74 参照。

77 【ド辞典】には、死者の魂が腹を立てるので、死者について語るのは、罪であり危険だとある（付録 71、寺田・安田[訳] 2019: 125）。

78 本稿第 5 節の「図版への解説」ではイコーニッ *ikōnit* となっている。

79 イコニッ *ikonit* は iku-nit「飲酒・串」のこと。moustache-lifter「髭べら」と呼ばれることがあるが、これは「本来神々に神酒を捧げるためのものであり、アイヌがこれに心をこめて彫刻することからも、彼等のこれに対する単に髭をかき上げる便宜的な気持でなく、もっと深い真剣な気持が覗われる」（【住居民具】195）。

80 ウンジカ・ムイ *unjika-mui*「火の・神」とあるのは誤植。

大きな呪術の集会

私はこれらの巫術のうちの 1 つに出席することを切に望んでいた。そして幸運にも、友人ヤノスケの好意で私のために特別に手配された機会を得ることができた。ある土曜日の夜、ちょうど暗くなりはじめ、西の空に明るさが残っているとき、私たちは一緒にトゥスグルの家に行った。そしてそこに他の村人が集まりつつあったか、すでに到着していた。私たちが入ると、小屋の中を車座になっている群衆が見えた。男性が内側に列をなし、女性は大部分が右側の隅にいた。そして大勢の子供たちが年長者の後ろにいた。私に割り当てられた場所は、遠く左手にある茣蓙の上だった。たった 1 つの灯りである、裂けた棒の上に置かれた芯の付いた皿[81]は、一座の人の顔をほんの微かに照らしていた。炉には一人の毛深いアイヌが、医者（トゥスグル）が使用するためのアザラシの皮の太鼓を薪の火の前であぶって準備していた。すぐにシャーマン（トゥスグル）本人が到着して、薄気味悪い沈黙の中、炉のそばの自分の場所へと歩んだ。トゥスグルは助手から太鼓を受け取り、拳と肘で軽く打ち始めた。トゥスグルはその間ずっと不明瞭にブツブツつぶやいていた。それからトゥスグルが発する音が暴力的になり、あたかも激しい歯の痛みによって攻撃されたかのように―レ、ヘ･ロ･ホ、フム･フム―［と声をあげ､］トゥスグルは太鼓の真ん中を叩き、頭をのけ反らせ、叫び声をあげた。男達は恍惚状態[82]になり叫び声をあげた。神がやって来つつある。その間、後ろの少年たちは控えめな鼻歌を続け、この風変わりな礼拝の聖歌隊員として振る舞った。しかし、戸が開いて、一人の女の子が入ってきた。［トゥスグルは］女を呪った！神が去ってしまったからである。

トゥスグル *tusuguru* は巨大な樹皮縄の冠と神聖な削りかけを身につけ、巫術を再開した。トゥスグルは再び太鼓を打ち、もう一度恍惚状態に向かった。飛び上がって踊り始め、つま先を鳥の爪のように曲げた。それは神が沈みゆく太陽の方向からチドリの形をしてやってきたからである。「ポサン *Posán*、早く来てください」と男たちは叫び、少年たちは鼻歌を歌い、トゥスグル *tusuguru* は次第に荒れ狂った。残念なことに西の隅の側桁にトゥスグルの冠がひっかかる―という不運の前触れがあり、彼はもう一度始めなければならなかった。ようやく、疲れ果て、汗をかきトゥスグルは努力するのをやめた。冠を助手の頭にかぶせ、座って静かにキセルを吸った。

助手はその間、太鼓を火の前であぶった。すぐに、トゥスグル *tusuguru* はキセルを吸い終え、ブツブツ言って、再び豚のようにブーブーつぶやきはじめた。トゥスグルは水の入った桶を持ってくるように命じ、そして二つのイナヲ *inawo* を手に取り、ブラシのような形にした。これらの上にトゥスグルは水をふりかけ、そして群衆全員を清めるために直ちに前進した。これを終えると、トゥスグルは太鼓と踊りを再開した。かつてないほど怒りにあふれていた。トゥスグルはおおざっぱな円を描き、観衆のヤ！ヤ！［という声］によって励まされ、水神が本当に来たと納得するまで続いた。それから

[81] 燭台のこと。多蘭泊では caxroku と言い、四ツ割に棒の先にホタテ貝の殻を乗せ、そこに鯨油をいれて火を灯す（【住居民具】108-109）。
[82] 原文では ectasy となっているが、ecstacy だと判断し、恍惚状態と訳した。

太鼓を助手に渡して、トゥスグルはイナヲ *inawo* の削りかけの束を水に浸して、そして慢性の病気に苦しんでいる自分の兄弟の胸と背中を洗い清めに向かった。

再びさらに飛び跳ねてわめいた―火の神が呼び出された。火の神がお出ましになった。トゥスグル *tusuguru* は、捧げられた削りかけの塊［束］のいくつかに火をつけた後、それらを北西の隅にいる病人に運んでいった。トゥスグルはナイフを使ってその男性の腕を切開し、その熱い灰をすり込んだ。病人の腕には 5 年前病に苦しんでいたときになされた多くの切開の跡が残っていた。そうして、トゥスグルらは悪い血（ウェン・ケム *wén kem*）を追い出した。強い痛みを伴う治療を望んでいないが、私は観衆が楽しめるように「私も病気だ」と叫んだ。そして観衆は私をエコイシャンバ *ekoishamba*（模倣者）[83]呼ばわりした。医者［トゥスグル］は、太鼓をたくさん叩いたり、激しく体を動かしたりしながら、私の病に関して神託を求め、私を診察しはじめた。つまんだり、突いたり様々なことをした後、こう叫んだ―イコニ・イサム、ケム・ピリカ *ikoni isam, kem pirika*[84]「彼は病気ではない、血は良い」―そして追い払われた。

南西の隅にいた女の子は、明らかにてんかんに苦しんでいたが、トゥスグルの治療を受けるために次にやって来た。二人の男が少女を押さえていた。医者（トゥスグル）は燠（fire-pellet）をいくつか準備し、それらを 1 本のイナヲ *inawo* に置き、そして全てを少女の胸に突っ込んだ。少女は悲鳴を上げたが、しばらくの間、男性に押さえられたままの状態を余儀なくされた。解放されたとき、彼女は叫び声をあげて、暗闇に駆け出した。姉／妹が彼女を追ったが、すぐに一人で戻ってきた。

さて、最後の踊りになった。夕方に使用された何本ものイナヲ *inawo* は、次々と取り上げられて捨てられるが、戸のところで準備していた子供たちは、それらのイナヲを持って出ていき、川に投げ入れた。そしてそこから、イナヲは海へ運ばれていくが、治療された病気も一緒に流れていく―単純な人々はそう考えた。

対雁アイヌの言語

対雁アイヌは、渡島アイヌの言語を理解しないと明言し、その逆もまた同様であるが、二つの集団の言葉の間にはほんのわずかな方言的差異しか存在しないことは疑いがない。一般的な言葉のいくつかは異なっており、発音もまた異なる可能性があるが、これが［違いの］全てのようである。渡島アイヌは［対雁アイヌと］同じ道具を使用しないというのは本当で、対雁で手に入れたチェベチョイェネ *chebechoyene* とシカリバチョイェネ *shikaribachoyene* を、友人と私が有珠アイヌに見せたところ、有珠アイヌにとっては全くなじみのないものだった。

ロシアの影響については、対雁アイヌはロシアの歌を歌い、去年［樺太の］南を訪れたアイヌは、

[83] ekoysampa は「～を真似る」という意味だろう。参考：「エイコイサンパ【e-ikoysampa】～を真似る，同じようにする．＊食べる真似，歩く真似，しゃべる真似」(【萱野辞典】123)。
[84] ikoni isam「病気・～がない（もしくは、病気である・否定）」, kem pirika「血・～が良い」。

話したときにロシア語がかなり理解できることが分かったと、私に語った。日本語の影響は語彙にはっきりと現れており、動詞の活用においてさえも日本語の語形を受け入れている[85]。両方の言語に共通する単語のどれほど多くが、本来どちらの言語に属しているのかを判断することは難しい。

対雁アイヌの発音のいくつかの点は、その言葉を聞いた人は必ず気がつくだろう。

1.［対雁］アイヌは言葉を強く強調し、1 つの音節中に多くの子音が共起する点で、日本語とは異なる。

2. スコットランド語やドイツ語の *ch* のような喉音がしばしば繰り返される。これを私は語頭では *kh* という文字で、そして他の場所では *gh* で翻字した。

3. 対雁アイヌは *dr* のような音を出すようにして、文字 *r* を発音する際に歯を使用する。

4. 慣れないものにとって *b* と *p* の違いを捉えることは困難であり、私やその他の者によるその区別はおよそ恣意的なものであると考えられる。

5. 語彙の比較によって、*j* と *p* は交換可能であると思われる:

平取 パプシ*papush*　　対雁 ジャプシ*japush*.［平取、対雁とも「唇」］
　　バロ *baro*　　ジャロ *jaro*.　　［平取、対雁とも「口」］

6. 奇妙な *kf* という音が存在するが、これは私が思うに、日本の南方地域の一部におけるのク *ku* の *kfu* という音に相当する。

7. アイヌの女性たちは子音を非常に軽く発音するが、それは私も経験豊かな言語学者である友人もニバボ *nibabo*「椀、鉢」という言葉を聞きそこない、二人ともムアポ *muapo* と書き取るほどである。

アイヌは、よく知られているように、文字を持たない。

私のノートにある、語彙とわずかな文法のスケッチについては、再度の訪問による修正で、より信頼のおけるものとなった時に［日本アジア］協会に提出したい[86]。

[85] 例えば、知里（1948: 332）にはウコソータンシタリ uko**sootansi**tari というように日本語の「相談する」がアイヌ語の動詞となった例（-tari は日本語の動詞からアイヌ語の動詞を作るのに用いられる。この例ではさらに接頭辞の uko-が付加されている）が掲載されている。

[86] その後、Dixon が語彙に関して発表した形跡はない。アイヌ語の文法に関しては J. M. Dixon（1883）と J. M. Dixon（1883）が発表されている。Ⅱの方は【ド辞典】の例文も用いて文法記述を行っている。

5.「図版への註釈」翻訳

図版[87]への註釈

J. M. ディクソン（MA ）

ここに掲載する資料は私が訪問した北海道（Yezo）の異なるアイヌの村で 1881 年と 1882 年の夏の間に私が収集したものである。本誌の 12 月号[88]には続きの図版が掲載される予定である。

アイヌの民具

最初のページに掲載の道具は全て対雁アイヌから購入したものである。対雁アイヌはサハリン、つまり樺太からつい最近やって来た集団である。

No. 1 ペラ *pera*「へら」[89]、No. 2 ウォサ *wosa*「筬」[90]、No. 3 ア(ッ)フンニッ *affunnit*「杼」[91]は、女性がニレの一種［1］ であるオヒオ *ohio*[92]の樹皮から原産の布を織る際に使用する道具[93]である。

［原註 1］植物学者たちは完全には同意していないが、その木に属するものだと思われる。

No. 4 は銛頭のキテ *kite* で、アザラシを捕獲する際に用いられる銛のものである。

No. 5 は鉤のヨテプ *yotép*[94]で、大きな魚を引き上げるのに使用される。大きな鉤針にはひもがついていて飛ばせるようになっており、一度魚の背中に鉤針が掛かってから引くと、その先端が魚の背中に食い込むようにして裏返るようになっている。

アイヌの家庭用品

No. 6, 7 は皿（オチキ *otski*）で、札幌で購入したものである。アイヌの影響を受けた装飾の種類がはっきり示されている。

---

87 図は本稿の末尾にまとめて掲載した。

88 本節の「アイヌの彫像とその他の民具」以降の部分が 12 月号に該当する。

89 ペラ *pera* は手前に引き寄せて横糸を締めるもの。

90 図で見るように、ウォサ *wosa* は櫛状のものであるため、ディクソンは comb「櫛」としているのだと思われるが、ここでは誤解のないよう筬と訳した。

91 ア(ッ)フンニッ *affunnit* は上下の糸の間に入れて横糸（これをアフンカ ahunka という）を通すもの。両端の股になった部分に糸を巻く。

92 註 22 参照。

93 樺太での織機に関しては【住居民具】216 頁に全体像がある。使い方をはじめ、北海道沙流地方の織機に関しては、萱野（1978: 53-56）が詳しい。

94 *yotép* は i-「それ」ohte「ひっかける」-p「もの」だと思われる。知里･山本（1973: 183）に図が掲載されている iminteni-iyohteh とだいたい同じものだと思われる。これを川の深みに入れて、そこに休んでいるサケをひっかけて取る。樺太東海岸の白浜ではサケとイトウにのみ、この鉄製の鉤を用いるという。

No. 8 は、茶碗のシカリバチョイェネ *shikaribachoyene* である。No. 9 は魚の椀チェベチョイェネ *chebechoyene* である。両者は対雁アイヌのみが用いる。少なくとも、それらの椀を見たネイティブの北海道アイヌ（Yezo Ainos）は名前を言い当てることができず、自分たちの家にはそのような道具はないと言った。

No. 10, 11 はカスプ *kasup*「さじ」である。いくつかの部品を組み合わせたものでも、一つの木を削り出したものでも、アイヌが彫刻に誇りを持っていることは注目に値する。

アイヌの衣服

No. 12 の後ろと前（半分）の図を掲載した。これはチキリビ *tsikiribi*「装飾されたアイヌの衣服である。このスケッチの元である実際の衣服は、私が長老のペンリ *Penri*[95]の好意によって平取 Biratori の女性から購入したものである。ちょうど洗って吊るして干してあるのが私の目に留まった。その衣服の材料はアイヌのものではなく、青、白、赤の色をした日本の木綿衣の端切れであるが、デザインと技術は純粋にアイヌのものである。

No. 13 は前掛けのマイタレ *maitare* である。No. 14 は女の子の頭飾りのヘトモイェ *hetomoye*[96]、No. 15 は男の着用する脚絆のホシ*hos* である。

アイヌの彫像とその他の民具

No. 16a, 16b, 16c は、アイヌの彫像、つまり神のシンボルである（イナヲ *inawo*）。アイヌは見知らぬ人のために快く、樹皮を剥いだ切られたばかりの枝から削ってくれるので、特別な聖性を持っているようには思われない。

No. 16a は *Opitta-kamui*「世界神[97]」である。

No. 16b はチュプ･カムイ *Chup-kamui*「太陽の神」である。

No. 16c は女神に対して捧げられるものであることを示す軸への飾りがついている。その女神はトンベ･カムイ *Tombe-kamui*「月の女神」である。

No. 17 はイコーニッ *ikōnit*「髭べら」[98]で、平面と側面の図を掲載した。これはアイヌが食べたり飲んだりするときに使用される。酒を飲むときにまず最初にすることは、酒杯 *sake* cup を持ち上げ、その中にイコーニッ *ikōnit* を浸し、そして特別に敬っている神々に順番に酒を数滴振りかける。飲食物を口に運ぶ時に口髭が邪魔にならないようにするという、より実用的な目的のためにも用いている。

---

[95] 平村ペンリウㇰのこと。バチラー（1928）などでその人柄を知ることができる。

[96] The Tsuishikari Ainos ではヘトノイェ *hetonoye* とある。ピウスツキの記録では女性用の鉢巻 hetomoe, hetomoye とある（中川 1998: 89）。

[97] 註 74 参照。

[98] The Tsuishikari Ainos ではイコニッ *ikonit* とある。

図に掲載したイコーニッの表面の彫刻はアザラシを表している。

No. 18 はマキリ *makiri*「小刀」である。

No. 19 はキシェリ *kisheri*「きせる」で白い木から作られ、火皿は鉛で裏打ちされている。女性は常に喫煙している。

アイヌの楽器

No. 20 は木製のモクニ *mokuni*[99]「口琴」である。台湾（formosa）の先住民族がこれに似たような楽器を持っていると言われているが、それには銅の舌がある。私は、一般によく使われている楽器とほとんど同じ金属製の口琴を二つ見たことがあるが、女性が持っているもので、非常に心地よい音を奏でる。アイヌによれば、山丹 Santan（満洲）からそれら［金属製の口琴を］を得たという。

No. 22 は、トカリ *tokari*[100]「五弦琴」である。弦（明らかに和人から得たもの[101]）が、細い先端で鮭皮[102]の部分に取り付けられており、2 つの駒（琴柱）の上に張られている。私にこの楽器を売ってくれた対雁アイヌの女性は指で単調なメロディーを少し奏でてくれた。

No. 21a, 21b は弓（ク *ku*）と矢（アイ *ai*）である。弓はイロマキ *iromaki*[103]から作られており、矢は山丹 Santan の金属の矢尻が付けられている。私にそれらを売ってくれた男性は、その弓と矢で三頭のクマを仕留めたと語った。

アイヌの墓

他のアイヌの墓*の写真と比較すると、対雁アイヌの墓がかなり異なっていることが分かるだろう。長さ約 3.5 フィートの新しく伐られた丸太は、樹皮と、一つを除いたすべての枝が取り除かれ、現在の彫刻に示されているようにわずかに装飾された後、死者の頭の上の地面に固定される。明るい色の木の六つの小さな杭と、彫刻のなされた二つの黒っぽい木の平らな部分が墓であることを示している。青とオレンジ色の布切れがあちこちで、これらや大きな墓標に付けられている。おもちゃの槍と銛が丸太（墓標に）立掛けられている。

このスケッチは、偶然にも私が対雁にいた、今年（1882 年）の 8 月の最後の週に亡くなった高齢のアイヌの墓のものである。アイヌの墓は見つけることが非常に困難であり、そしてアイヌは見知らぬ人を墓に案内することを拒絶する。

* Scheube's, Illustrations, Tafel VI を参照。Transactions of the German Asiatic Society of Japan, February, 1882.

---

99 ピウスツキの記録では竹の口琴がモクニ мокуни, mokuni とある（中川 1998: 76）。「ツイシカリ・アイノ」の第 4 節ではモークニ *mōkuni* とある。註 31 参照。

100 「ツイシカリ・アイノ」ではトンカレ tonkare とある。註 32 参照。

101 本来はクジラの腱やトナカイの筋、イラクサの繊維を用いたようだが、後に三味線の弦が代用されている（谷本 1958: 252-253）。

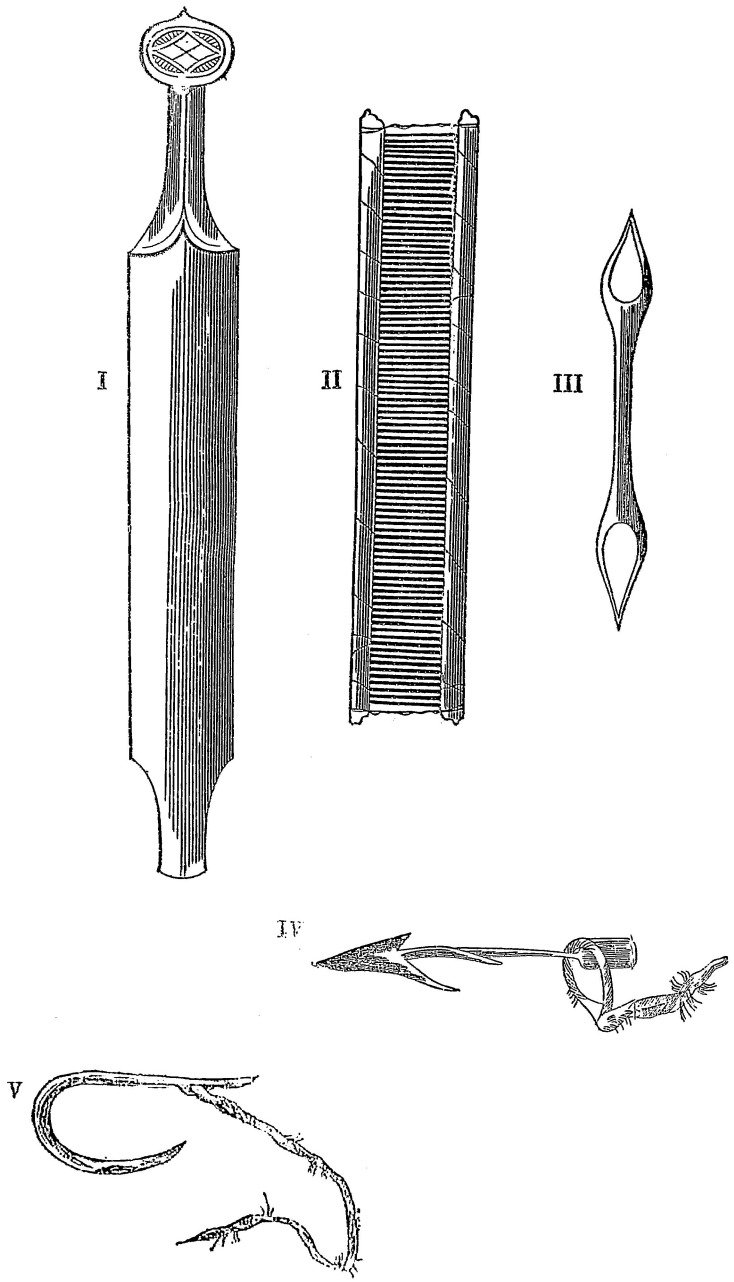
102 多くの場合、アザラシの皮を用いる（谷本 1958: 251）。鮭皮を用いているのは、アザラシ皮が手に入らなかったことと関係しているのだろうか。

103 註 28, 29 参照。

6. 図版

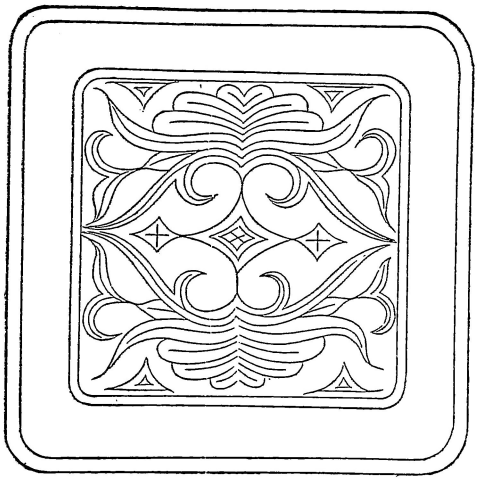
以下に Dixon (1882c) の図版を 86%に縮小して掲載する。原文に縮尺は書かれていない。

アイヌの民具

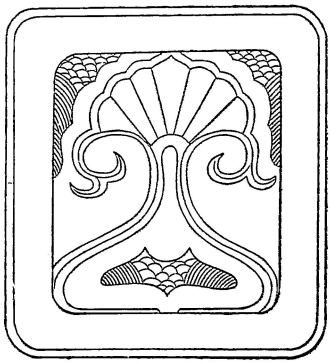


アイヌの家庭用品

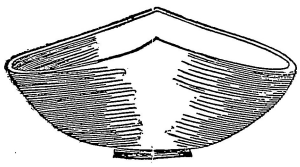
VI



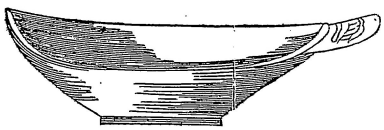
VII



VIII



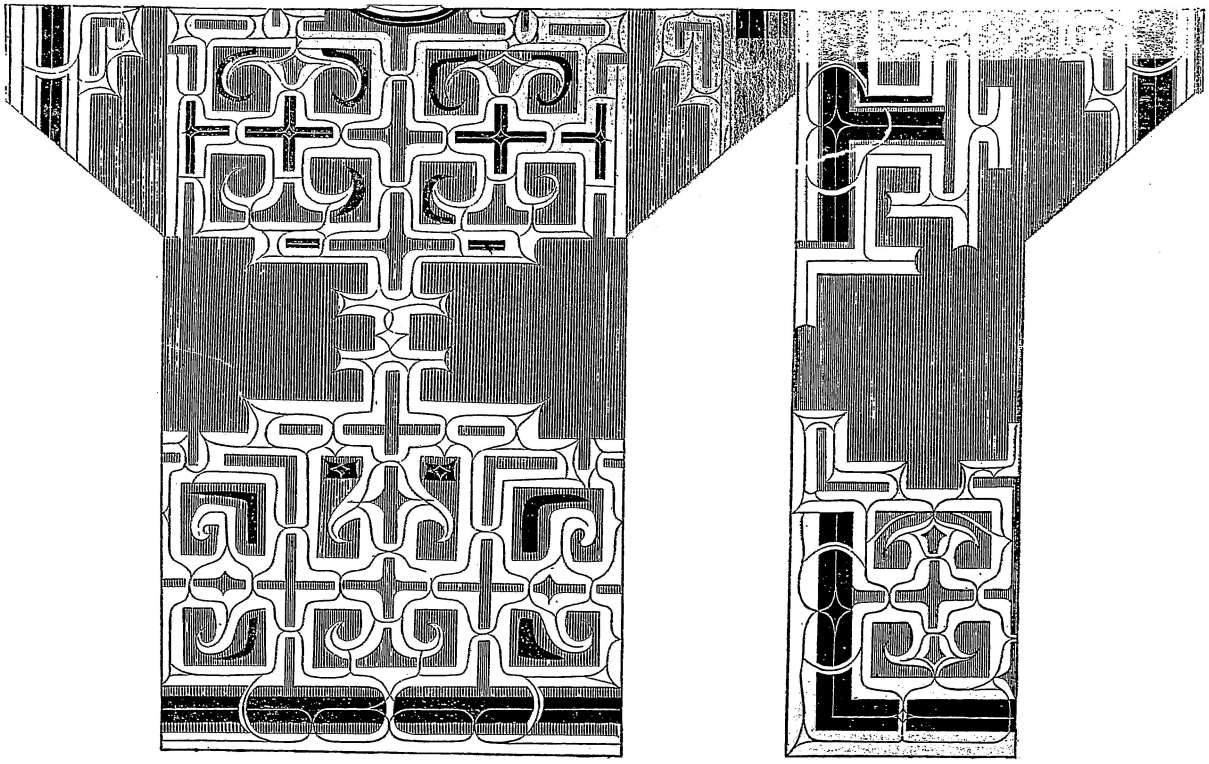
IX



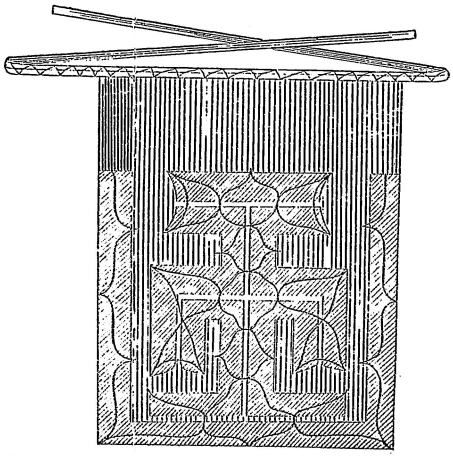
X

XI

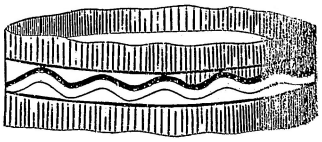
XII



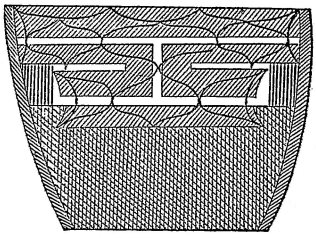
XIII



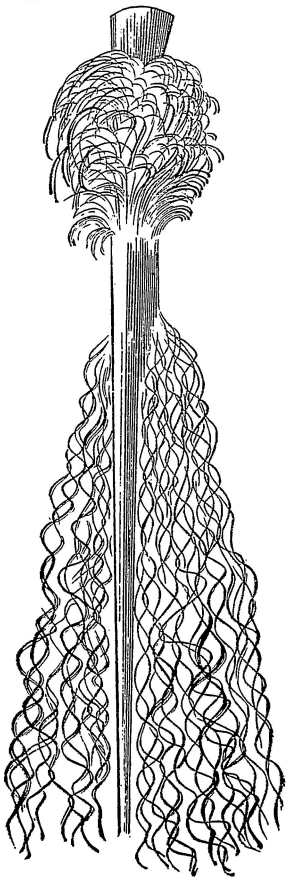
XIV



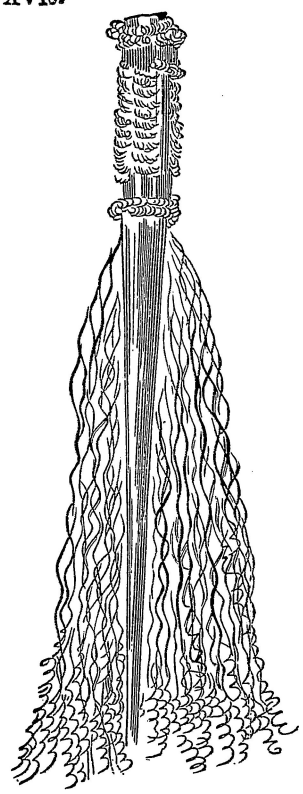
XV



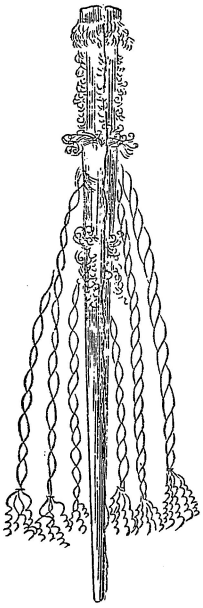
Ia.



XVIb.



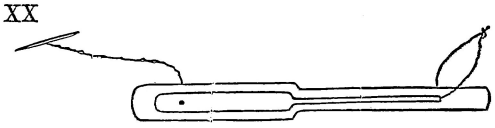
XVIc.



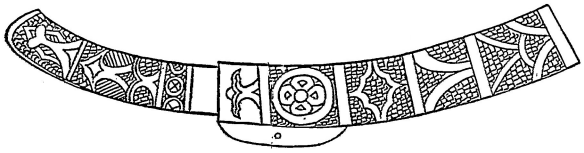
XVII.

XVII.

XX

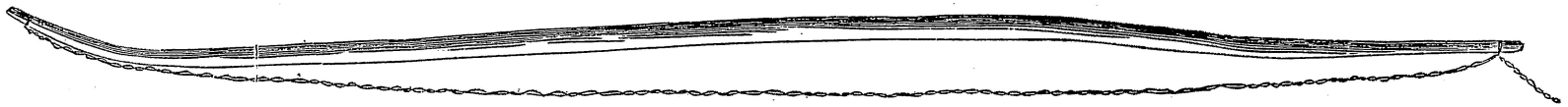


XVIII.

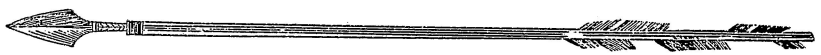


XIX

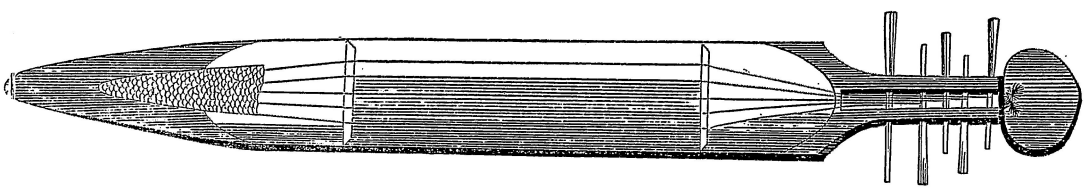
XXI*a*.



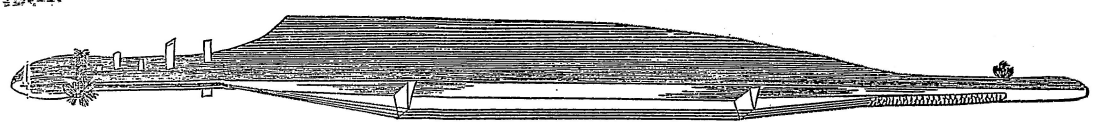
XXI*b*.



XXII.

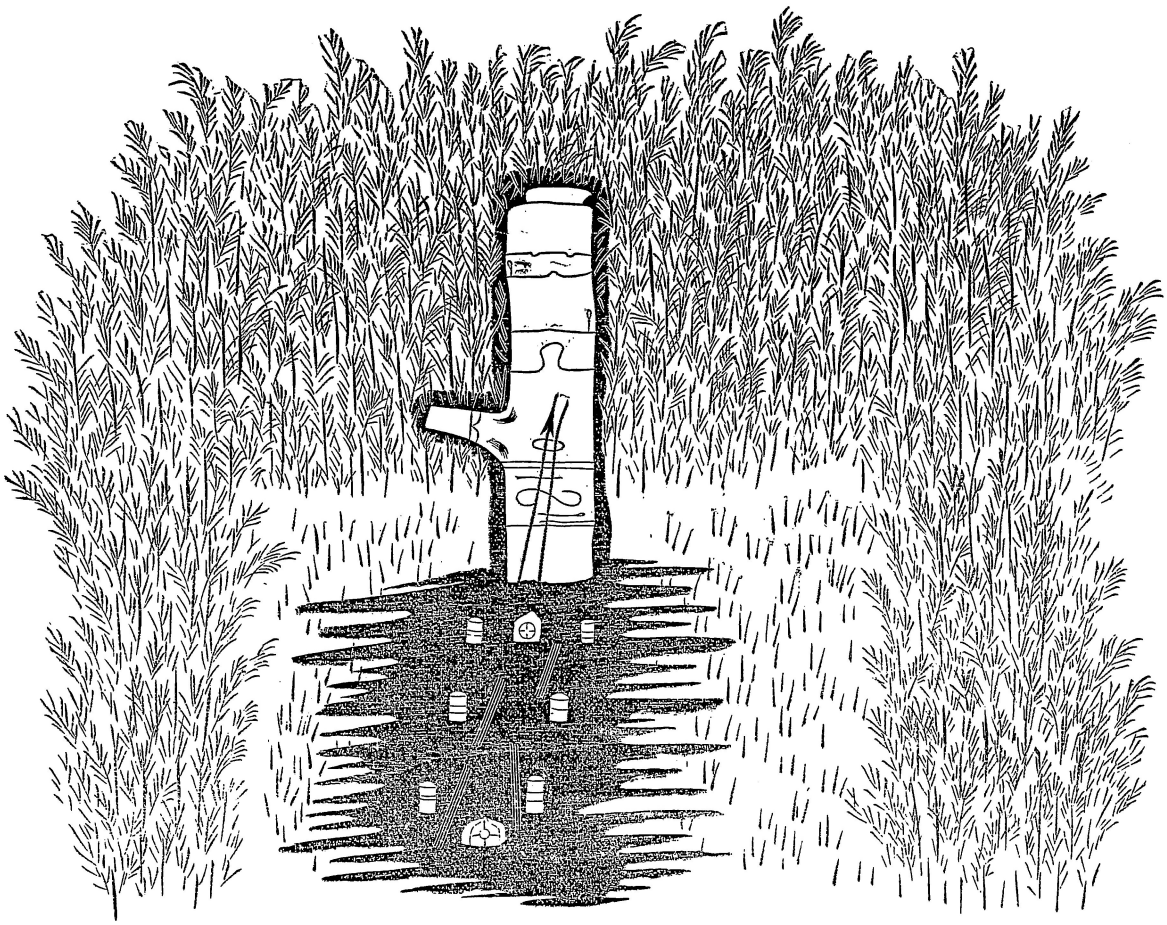


XXII.



アイヌの弓矢と琴

アイヌの墓



謝辞

拙い翻訳を読んでコメントをくださった千葉大学の中川裕先生、吉川佳見氏、東京大学大学院の山田慎太郎氏、さらに平石清隆氏、相原典明氏、浦野和枝氏、大野徹人氏に感謝申し上げる。頂いたコメントによって、翻訳の誤りをいくつか訂正することができた。また、報告に登場する対雁アイヌに関しては石村博子氏から御教示いただいた。深く感謝申し上げる。本稿に誤りがあれば、全て筆者（阪口）の責任である。

参考文献

【欧文文献】

Batchelor, J. (1901) *The Ainu and their Folklore*. London: The Religious Tract Society.

Batchelor, J. (1925) *Ainu Fireside Stories*. Tokyo: Kyobunkan.

Dixon, J. M. (1881a) Traveling in Yesso1, *The Chrysanthemum* 1 (11), pp.421-425. Yokohama: Kelly.

Dixon, J. M. (1881b) Traveling in Yesso 2, *The Chrysanthemum* 1 (12), pp.466-471. Yokohama: Kelly.

Dixon, J. M. (1882a) A Visit to Poronai, *The Chrysanthemum* 2(10), pp.436-440. Yokohama: Kelly.

Dixon, J. M. (1882b) Notes to Illustrations, *The Chrysanthemum* 2, p.507, opposite page 528. Yokohama: Kelly.

Dixon, J. M. (1882c) Aino Illustrations, *The Chrysanthemum* 2, opposite page 480, 507-508, 528. Yokohama: Kelly.

Dixon, J. M. (1883a) The Aino Language, *The Chrysanthemum* 3(2), pp.67-71. Yokohama: Kelly.

Dixon, J. M. (1883b) The Aino Language Ⅱ, *The Chrysanthemum* 3(3), pp.110-113. Yokohama: Kelly.

Dixon, J. M. (1883c) The Tsuishikari Ainos. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 11, pp.39-50. Yokohama: Asiatic Society of Japan.

Добротворский, М. М. (1875) *Аинско-Русский Словарь.* Казань.

Landor, A. H. S. (1893) *Alone with the hairy Ainu : or, 3800 miles on a pack saddle in Yezo and a cruise to the Kurile islands*. London: J. Murray.

Ohnuki-Tierney, Emiko (1981) *Illness and healing among the Sakhalin Ainu*. New York: Cambridge University Press.

Pfitzmaier, August (1851) *Über den Bau der Aino-Sprache*, Kaiserliche Akademie der Wissenschaften zu Wien.

Piłsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.

Пилсудскій, Б. (1914) На медвѣжьемъ праздникѣ айновъ о. Сахалина, *Живая старина, годъ XXIII, вып. 1-2*, pp.67-162.（日本語訳はピウスツキ 2018）

Piłsudski, B. (1990) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore* Vol.2. Cracow.

Scheube, B. (1881) Die Ainos, *Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*

3, no 26, pp. 220–250 & 255-256. New York

Siebold, H. V. (1881) Ethnologische Studien uber die Aino auf der Insel Yesso, *Zeitschrift für Ethnologie*, no 13, pp.1-38. Berlin: Verlag von Paul Parey.

Bird, Isabella L. (1880) *Unbeaten Tracks in Japan. An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo, and the Shrines of Nikko and Ise*. London: John Murray.

【日本語文献】

秋山勇造（2004）「日本アジア協会と協会の紀要について」『人文研究』152、pp.71-82.

阿部正己（1985）「アイヌ叢誌 六」河野本道[選]『アイヌ史資料集 第 2 期 第 6 巻阿部正己文庫編』北海道出版企画センター.

小川正人（2013）「対雁学校の歴史―北海道に強制移住させられた樺太アイヌの教育史」『教育学研究』80（3）、pp.309-321.

大貫恵美子（1979）「第二章 南樺太北西海岸のアイヌの生活」知里真志保・山本祐弘・大貫恵美子『樺太自然民族の生活』相模書房、pp.96-127.

荻原眞子[訳]（2000）「B. ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6、pp.219-240.

荻原眞子[解説]･丹菊逸治[翻刻･訳注]（2001）「千徳太郎治のピウスツキ宛書簡―「ニシパへのキリル文字の手紙」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4、pp.187-226.

荻原眞子･古原敏弘（2012）「アイヌの犬橇関係資料概要―ロシアの博物館所蔵品について―」『アイヌ民族文化研究センター研究紀要』18、pp.91-114.

萱野茂（2002）『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』三省堂.

昭和女子大学近代文学研究室（1972）「ジェイムズ･メイン･ディクスン」女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第三十五巻』昭和女子大学近代文化研究所、pp.319-367.

千徳太郎治（1929）『樺太アイヌ叢話 全』市光堂.

高倉浩樹[監修]･井上紘一[訳編･解説]（2018）『ブロニスワフ･ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルタ～』東北大学東北アジア研究センター.

谷本一之（1958）「アイヌの五弦琴」『北方文化研究報告』13、pp.243-270.

田村将人（2011）「先住民の島･サハリン―樺太アイヌの日露戦争への対処」『日露戦争とサハリン島』、北海道大学出版会、pp.97-127.

知里真志保（1948）「樺太アイヌの説話」『民族學研究』12（4）、pp.328-338.

知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典 植物編』日本常民文化研究所.

知里真志保（1954）『分類アイヌ語辞典 人間編』日本常民文化研究所.

知里真志保（1962）『分類アイヌ語辞典 動物編』日本常民文化研究所.
土橋絹子「ジェイムス･メイン･ディクソン」『学苑』169、pp.66-79.
ドブロトヴォルスキー, M. M.（2018）「アイヌ」（井上紘一[訳]）高倉浩樹[監修]･井上紘一[訳編･解説] 収録.
ドブロトゥヴォールスキー, M. M.（1996）「M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語･ロシア語辞典(3)」（寺田吉孝[訳]）『北海学園大学学園論集』86･87、pp.79-91.
ドブロトゥヴォールスキー, M. M.（2018）「M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語･ロシア語辞典(25)」（寺田吉孝･安田節彦[訳]）『北海学園大学学園論集』177、pp.49-90.
ドブロトゥヴォールスキー, M. M.（2019）「M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語･ロシア語辞典(26)」（寺田吉孝･安田節彦[訳]）『北海学園大学学園論集』178、pp.121-149.
鳥居龍蔵（1903）『千島アイヌ』吉川弘文館.
中川裕（1987）「ヨーロッパ人によるアイヌ語調査の歴史」『アイヌ文化』12、pp.24-38.
中川裕（1998）「ペテルブルグ MAE コレクションのアイヌ語資料」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1、pp.67-109.
仁多見巌[編]（1965）『ジョン･バチェラーの手紙』山本書店.
バチラー, ジョン（1928）『我が記憶をたどりて』文録社.
服部四郎[編]（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
早川昇（1970）『アイヌ民俗』岩崎美術者.
ピウスツキ, ブロニスワフ（2018）「（報告 5）1903～1905 年に樺太島のアイヌとオロッコの許へ出張した B･O･ピルスツキーの報告」（井上紘一[訳]）高倉浩樹[監修]･井上紘一[訳編･解説] 収録。
ピウスツキ, ブロニスワフ（2018）「樺太アイヌの熊祭りにて」（井上紘一[訳]）高倉浩樹[監修]･井上紘一[訳編･解説] 収録.
ピウスツキ, ブロニスワフ（2018）「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」（井上紘一[訳]）高倉浩樹[監修]･井上紘一[訳編･解説] 収録。
ピウスツキ, ブロニスワフ（2018）「樺太アイヌの熊祭りにて」（井上紘一[訳]）高倉浩樹[監修]･井上紘一[訳編･解説] 収録.
北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会訳（1989）「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料〈70〉」『創造の世界』70、pp.116-129、小学館.
北海道開拓記念館[編]（1973）『民族調査報告書 資料編 I 』（北海道開拓記念館調査報告 / 北海道開拓記念館編, 第 2 号）北海道開拓記念館.
本間至能富（1981）「ヒグマ、丘珠で 3 人殺す」北海道新聞社(編)『北海道大百科事典 下巻』北海道新聞社、p.447.

村崎恭子[編訳]（2001）『浅井タケロ述 樺太アイヌの昔話』草風館.
山本祐弘[著]･知里真志保[協力]（1970）『樺太アイヌ･住居と民具』相模書房.
山邊安之助[著]･金田一京助[編]（1913）『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』博文館.
和田完（1964）「アイヌ語病名について―和田文治郎遺稿 1―」『民族學研究』29（2）、pp.99-112.
和田完（1965）「アイヌ語病名資料―和田文治郎遺稿 2―」『民族學研究』30（1）、pp.47-67.

URL

北海道大学植物園ホームページ
https://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/e_aboutus.html（2019 年 9 月 29 日最終閲覧）.

（さかぐち　りょう・千葉大学人文公共学府博士後期課程）

The Tsuishikari Ainos: J. M. Dixon, 1882, Tokyo

SAKAGUCHI Ryo

Summary:

This text is a Japanese translation of "Tsuishikari Ainos" and "Notes to Illustrations" by James M. Dixon (1856-1933). The author, J. M. Dixon, was a Scottish teacher at the Imperial University of Japan. The original manuscript was written in English. This paper contains his experiences of the Sakhalin Ainus' lifestyle in Tsuishikari in Hokkaido. Tsuishikari is the place where Sakhalin Ainu were relocated. In 1875, Sakhalin became a Russian territory through the Treaty of Saint Petersburg. Therefore the Japanese government required Sakhalin Ainu to emigrate to Japan. As a result, more than 800 people were made to migrate to Tsuishikari. Dixon visited them in 1882 and recorded their lifestyle and collected their folkcraft. There are very few records about the Tsuishikari Ainu culture, thus his work is considered valuable.